

「外国語教授に際しても poetry を忘れるな」——

2021 年度会長就任のご挨拶に代えて

木谷 巖

2021 年度より、日本シェリー研究センターの会長に就任する木谷巖（きたにいつき）と申します。この度、年報第 30 号を統括されている黒瀬悠佳子編集長より、就任に際して一言をとというご依頼を受けました。今号は 2020 年度の活動記録にあたりますので、いささかフライング気味ではありますが、詩人シェリーをテーマに少し書かせていただくことにします。

まず、会長職の受諾についてですが、2020 年 10 月末に会長選挙の結果を受け、このような若輩者に重大な責務が務まるのであろうかという疑念あるいは恐れと、投票してくださった会員の方々のご期待に添いたいという希望のあいだで心が揺れていましたが、この葛藤のなかで、このような懷疑と希望のあいだで（もちろんスケールはまったく異なりますが）詩作を続けていたのが詩人シェリーではなかったかという思いに至りました。そのきっかけとなったのが、5 年ほど前から携わってきた、若き日の齋藤勇（さいとうたけし）が書き残した未公開（新発見）の英詩講義ノートの文字起こし作業でした。この研究チームの一員として、私はシェリーの講義ノート “Poetry of Ideality: A Study of P. B. Shelley” (1917-1918) を担当しました。そこで若き齋藤は、シェリーの詩の特徴として、自由と美に対する理想と過酷な現実のあいだで、「絶えず the infinite を求めて得ざる歎きを痛切に感じていた」と述べています。¹ これは 19 世紀後半において、イギリスの文学批評家たちの間で共有されていたシェリー観に重なるものであり、いまだにシェリー研究においては一大テーマでもある、いわゆる「懷疑（主義）的理想主義（sceptical idealism）」と主題的に重なるものといえます。

しかしながら、この「歎き」の部分は、若き齋藤ならではのアイデアといえます。後年の齋藤は、英詩研究の領袖として確固たる地位を築いたわけですが、歳月を経て、若き齋藤のシェリー観の特徴である、懷疑および「歎き」の部分は、ロマン主義的な「憧れ」（「抒情的詠嘆」とされています）に置き換えられてしまいます。つまり、後期の齋藤にとってのシェリー像は、「歎き（懷疑）」と「理想」の詩人というよりも、「理想」に「憧れ」る（あるいは焦がれる）詩人へと微妙にスライドしたことになります。この議論の詳細については『明星：明星大学明星教育センター研究紀要』第 10 号（2020 年 3 月）に、本プロジェクトの責任者でいらした笠原順路元会長による巻頭言（ならびにご論文）とともに、論文として収録されているのでよろしければご参照ください。²

¹ 齋藤勇 “Poetry of Ideality: A Study of P. B. Shelley” vol.1 (1917-1918), pp. 46-47.

² 「理想への「歎き」と「ねがい」：齋藤勇の Shelley 講義ノートに見られる後年の文学論の萌芽とその差異」『明星：明星大学明星教育センター研究紀要』第 10 号(2020 年 3 月)、23-36 頁。オンライン版 URL
<https://meisei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2621&item_no=1&page_id=13&block_id=110>

このように、時代とともに変化した齋藤におけるシェリー像という視点は、現在の齋藤勇のイメージ——日本の英文学研究の歴史に残る大家としての——形成とも関係しているといえます。いわゆる大学者としての齋藤勇に対する一般的な印象としては、保守的、非政治的という点が挙げられます。³ また、その象徴的な事例として挙げられるのが、伊藤整訳『チャタレイ夫人の恋人』発禁処分をめぐるいわゆる「チャタレイ事件」公判（1951-1957）に出廷した時の証言です。齋藤の立場は、この小説が性的欲望の問題を扱っただけの作品ではなく、当時の民衆がおかれていた窮状に向けられた作者の眼差しや道義的憤りが描かれているため、性的欲望が小説の主たるテーマでないのであれば、性的な描写が多少削除されたとしても、作者の意図は読者におおむね伝わるのではないか、といういささか距離を置いたものとなっています。⁴ D・H・ロレンスが主張した性の問題を含め、作品を世間的な道徳で縛ってはならぬという立場からその芸術的魅力を語った吉田健一や福原鱗太郎と比較しても、齋藤を芸術よりも世間的な道徳が先に立つ人物に見せてしまうことは否めません。⁵

むろん、言うまでもなく、人には社会的立場というものがあり、当時の齋藤は東京大学名誉教授であり、また東京女子大学学長でもあったがゆえに、小説内の性描写を削除することに反対しにくい地位にあったと推測することは難しくありません。ただ、興味深いのは、先ほど紹介したとおり齋藤の証言には、『チャタレイ夫人の恋人』のなかにある、資本家に搾取される民衆の窮状に対するロレンスの義憤についても言及があったという点です——「レディー・チャタレイズ・ラバーというのは、単に性欲の問題だけを取扱うのではなくて、虐げられておる人民大衆、彼〔ロレンス〕の憤りをあらわそうとする意図があったに違いないと感じられるのであります」。⁶

一見些末なことに見えるかもしれませんが、この証言のなかに、若き日の齋藤がシェリーの歎きや苦悩に向けていたまなざしと同種のもものが垣間見えるのではないのでしょうか。実際に、今回の若き齋藤によるシェリー講義ノートの複写作業のなかで発見された、ごく私的な覚書——これは、ノートの最終ページに折りたたんだ形で挟まれていた A4 版ほどの紙片で、「民衆藝術論」と題されています——には、晩年の超然とした態度からは想像もつかない、政治的発言も辞さない熱心な教育観が綴られています。そして、なぜ若き齋藤がシェリーをただの理想主義者ではなく、歎きと苦悩といったリアリストの側面を意識していたのかについて理解するためのヒントもまた、この紙片に隠されているのです。以下、原文を部分的に現代仮名遣いへと変換して引用します。

³ 齋藤の非政治性については、たとえば以下の著作で詳しく論じられています。宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』（東京：研究社、1999 年）、132-45 頁。

⁴ 倉持三郎『チャタレイ夫人の恋人』裁判——日米英の比較』（東京：彩流社、2007 年）、56 頁。本文および脚注中の〔 〕は筆者による挿入。なお、裁判の詳細については、小澤武二編『チャタレイ夫人の恋人に関する公判ノート I-IV』（全 6 冊、河出書房、1951-52 年）を参照のこと。

⁵ 同書、67-74 頁。

⁶ 同書、56 頁。

民衆藝術論

詩の “message” –Flecker—Watts-Dunton. p.32

Tolstoy

Julius Ceaser—Brutus

EXTERNAL VALUE OF POETRY.

感情⁷

詩人が unacknowledged legislator であるのは、詩が想像に訴えるからである。

cf. Speeches of Brutus and Anthony on the death of J. Caesar.

Macbeth が道徳的であったのは想像があった間だけ。

詩の教育上に與える影響

人は極論(ethics)で動くよりも感情で動く

Kubla Khan の如く non-moral and purely fanciful な詩でも人生を豊富ならしめるから、我々の道徳生活に資する。

“he loves no plays,

As thou dost, Antony; he fears no music.”(J.C. 1 2 203f.)

“The man that hath no music in himself,

Nor is not mov'd with concord of sweet sounds,

Is fit for treasons, stratagems, and spoils;

The motions of his spirit are dull as night,

And his affections dark as Erebus:

Let no such man be trusted.” (Merch. of V. 5, 83-88. Lorenzo)

国家有事の時に詩を作ったり読んだりすることに対する反対を駁す

Colvin on Keats

J. S. Mill: “What made Wordsworth’s poems a medicine for my state of mind was that they expressed, not mere outward beauty, but states of feeling, and of thought, coloured by feeling, under the excitement of beauty.” (“Autobiography”)

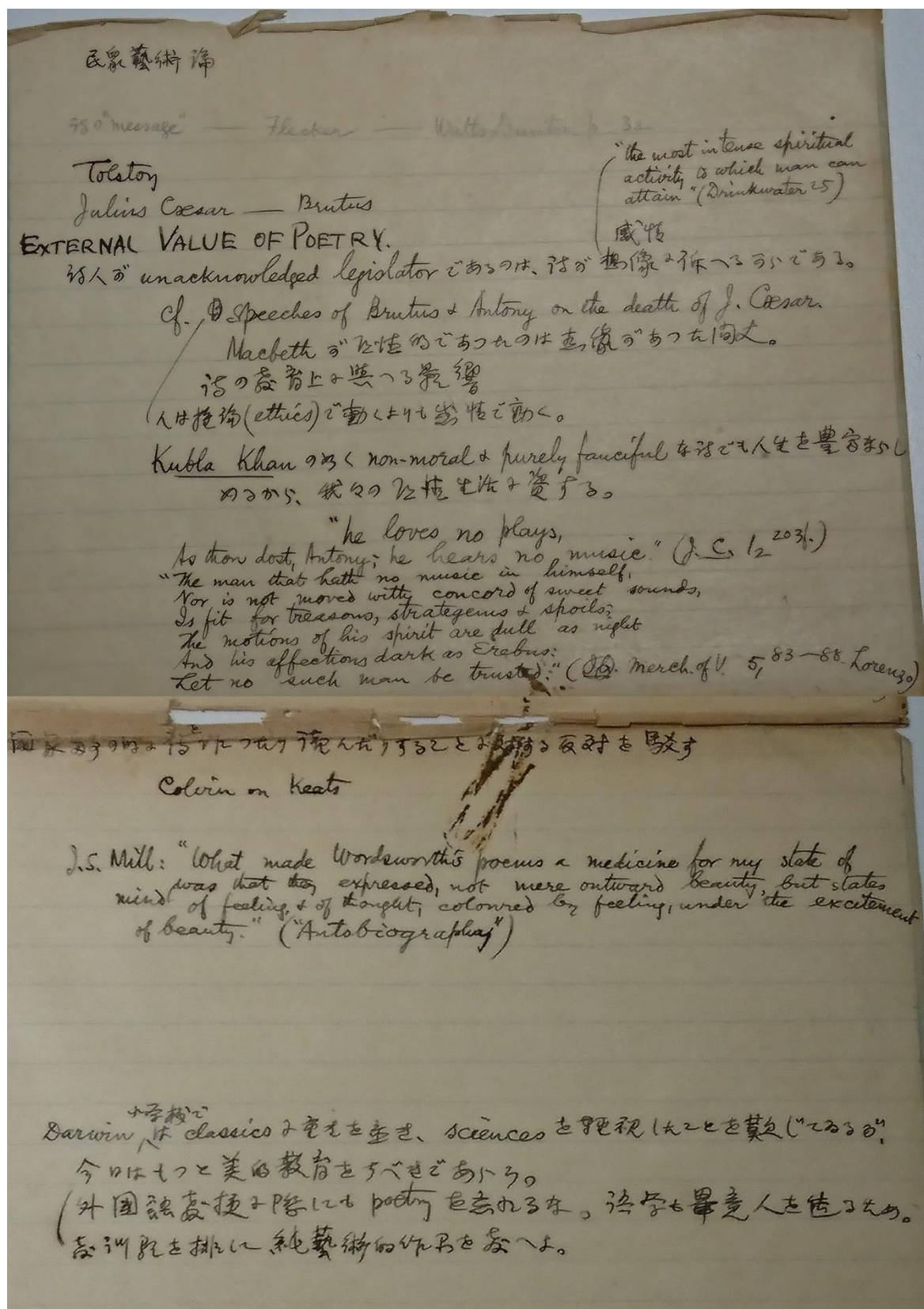
Darwin 小学校では classics に重きを置き、sciences を軽視したことを歎じているが、

今日はもっと美的教育をすべきであろう。

外国語教授に際しても poetry を忘れるな。語学も畢竟人を造るため。

教訓詩を排して純藝術的作品を教えよ。

⁷挿入: “the most intense spiritual activity to which man can attain ([John] Drinkwater [“Poetry and Conduct” *Prose Papers*, Elkin Matthews, London, 1917] 25)”



図版 1)「民衆藝術論」と題された紙片の全容 (笠原順路氏撮影)。© 明星大学図書館
二つ折りにしてノートにクリップで留められていたため、中央の折り目部分に錆びがある。

この紙片に浮かび上がる齋藤の政治性をめぐる議論については、前述の拙論文にて詳しく述べられているので、ここでは省きますが、シェリー講義ノートを作成時期が 1917 年から 1918 年にかけてと記録されているため、この私的な手記が書かれた時期は、第 1 次世界大戦の最中であった可能性が高いといえます。そうした状況下で書かれた「国家有事の時に詩を作ったり読んだりすることに対する反対を駁す」や「今日はもっと美的教育をすべきであろう」、そして「外国語教授に際しても poetry を忘れるな。語学も畢竟人を造るため」という言葉こそ、少なくとも若き日の齋藤の本心であったのではないのでしょうか。その著作集を概観する限りにおいて、また前述の「チャタレイ事件」公判における発言をみても、終生、みずからの政治的立場を明かすことなく、抑制的な語り口を貫いた齋藤勇の内心を知ることは不可能ですが、このごく私的な覚書には齋藤勇のたしかな思いが記録されています。さらに、この覚書に保存された齋藤の言葉は、きわめて今日的な問題、すなわち、英語教育における「実用英語」重視の傾向のなかで、文学の持ちうる——もっと言えば、シェリーの詩に内在する——「人を造る」力を忘れることなかれ、という呼びかけともリンクしています。さまざまな制約から免れた、偽らぬ本心の吐露としての覚書であるからこそ、いっそう力強く響く、「外国語教授に際しても poetry を忘れるな」という言葉は、シェリーの詩を研究し、それを教育に生かすことを実践するという営為がけっして無駄ではないという勇気を奮い起こしてくれるものです。現在のように、詩（文学）の危機どころか、感染症のために社会そのものが危機を感じている時代であるからこそ、ロマン派詩人シェリーの詩に希望の燈火を見出すことも可能ではないのでしょうか。その「炬火の運び手（“torch-bearer”）」となり、「見つめる眼差しでその明かりを古の時の中に放ち、その眼で、新たに愛を持って明かりを燃え立たす（“let his lamp out in old time with gazing / On eyes from which he kindled it anew / With love”）」——すなわち、シェリーが遺した一次資料の精読によって過去の時代に光を当て、そこからあらたに発見された学術的発見とともに、詩人の描いた美や希望の光を後世に伝えてゆくという営為をつうじて、本センターが果たしうる役割というものも見えてくるのではないのでしょうか。⁸

齋藤の覚書は、日本のシェリー研究の拠点である本センターの新会長として自分に何ができるかを問い直すきっかけにもなりました。事務局として実務を遂行してくださるエフィシエントな細川美苗先生（代表）と黒瀬悠佳子先生、ならびに会長補佐をお引き受けいただいた笠原順路先生、阿部美春先生をはじめ、会員の皆様の力をお借りし、シェリー夫妻のみならず、メアリ・ウルストンクラフトやウィリアム・ゴドウィン、そしてバイロンやキーツなどに関心をもつ人々に対しても開かれた、まさに日本における、シェリー・サークルのポータル・サイトになるような学会づくりに邁進してゆく所存です。まずはシェリー生誕 200 周年に向けて「現実（の不安）」と「理想」を見据えつつ、さまざまな計画を進めてまいります。あらたな体制で始動する日本シェリー研究センターにご期待ください。

（きたに・いつき：帝京大学）

⁸ Percy Bysshe Shelley, *Prometheus Unbound, Selected Poems and Prose*, ed. Jack Donovan and Cian Duffy ([London: Penguin, 2016), III. iii. ll. 148-51. 日本語訳は『鎖を解かれたプロメテウス』改版、石川重俊訳（東京：岩波書店、2003 年）から引用（一部改変あり）。

(図版提供・解説は全て笠原順路氏による)

図版 2)



齋藤勇の英詩講義ノートのサンプル。

cf. 笠原順路「若き齋藤勇の英詩講義ノート（明星大学資料図書館蔵）を読む」

https://meisei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2618&item_no=1&page_id=13&block_id=110・

・ 笠原順路「齋藤勇の“magic casements”：後の齋藤英文学を胚胎する「英詩講義ノート（Keats 篇）」

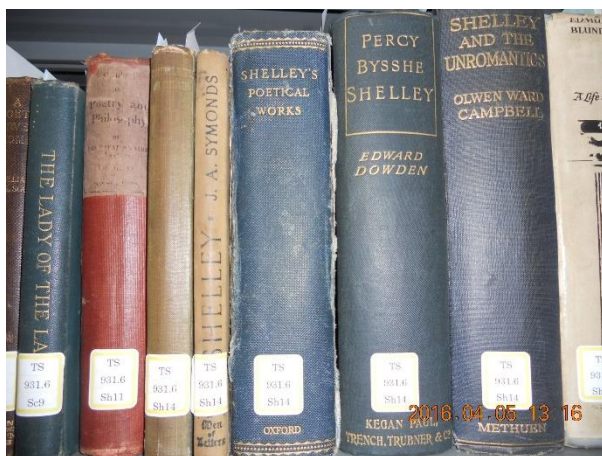
https://meisei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2619&item_no=1&page_id=13&block_id=110

・ 木谷巖「理想への「歎き」と「ねがい」：齋藤勇の Shelley 講義ノートに見られる後年の文学論の萌芽とその差異」

https://meisei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2621&item_no=1&page_id=13&block_id=110

・ 田代尚路「美と現実：齋藤勇が読む Tennyson の“The Palace of Art”」

https://meisei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2620&item_no=1&page_id=13&block_id=110



図版 3)

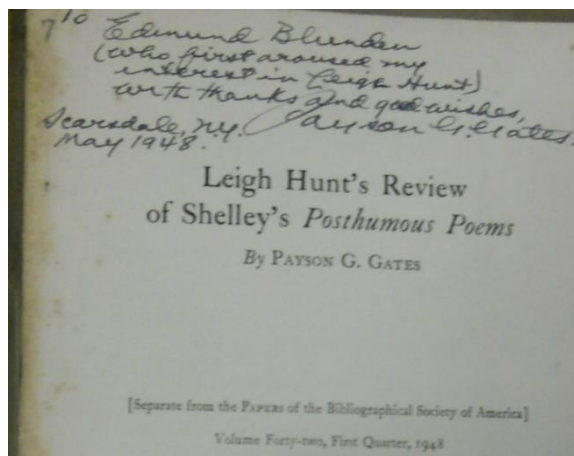
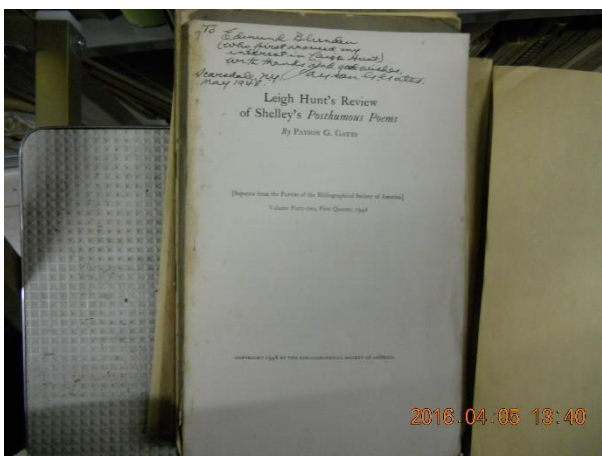
齋藤文庫内のシェリー関係蔵書の一部。



図版 4)

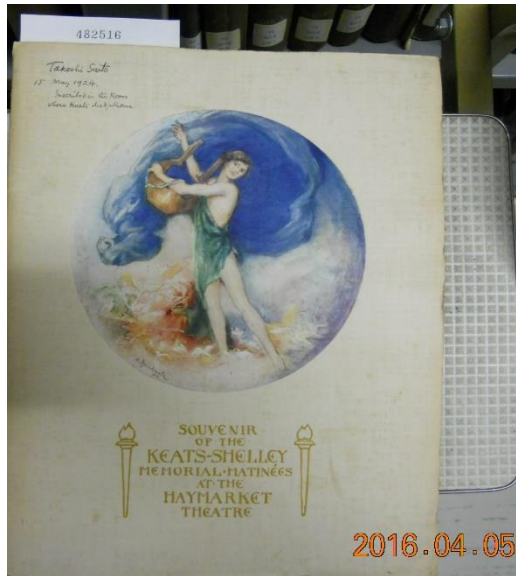
齋藤文庫内の未整理の手稿等が置かれた書架の一部。左端の封筒の中からシェリー関係のノートが発見された。(筆跡が図版 2) の封筒の上書きと一致。)

図版 5)

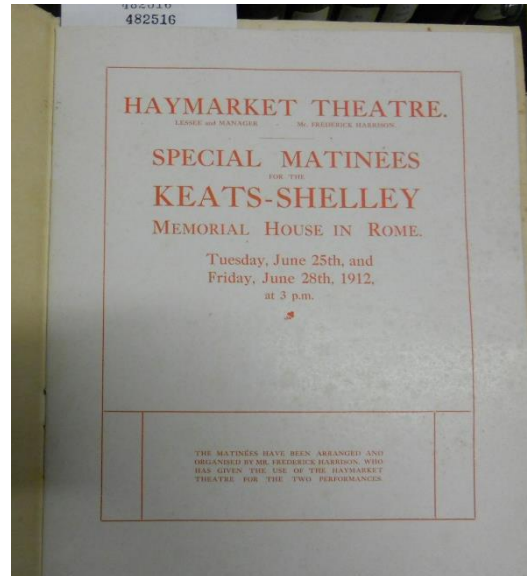


1948 年の The Papers of the Bibliographical Society of America, Vol. 42, No. 1 (First Quarter) に掲載された Payson G. Gates, “Leigh Hunt’s Review of Shelley’s Prometheus Poems” という論文の抜き刷りの表紙なのだが、左上の書き込みが実に興味深い。“To Edmund Blunden / (Who first aroused my / interest in Leigh Hunt) / with thanks and good wishes, / Payson G. Gates. / Scarsdale, N.Y. / May 1948.” この論文の著者 Payson G. Gates が Edmund Blunden に、学恩を謝して寄贈した抜き刷りである。著者の Payson G. Gates にはお気の毒だが、これを Blunden は齋藤勇に与えたようだ。

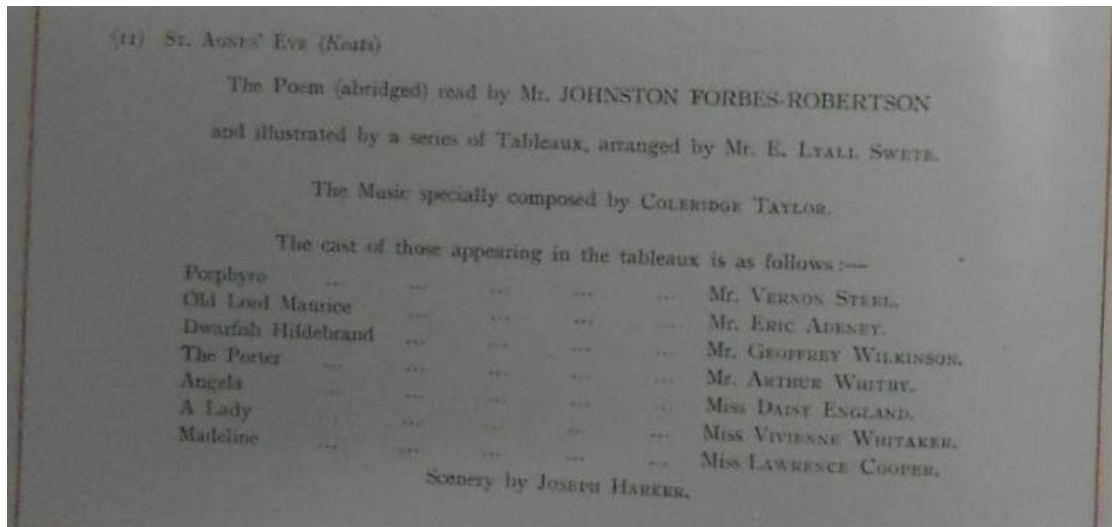
図版 6)



図版 7)



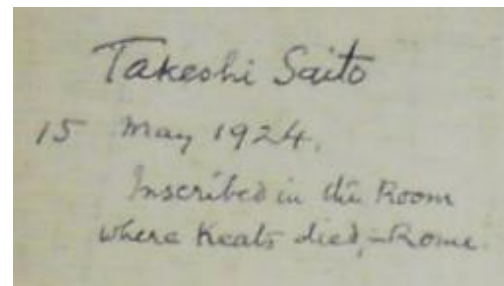
図版 8)



図版 6) は 1912 年 6 月 25 日と 28 日に、二度にわたりロンドンの Haymarket Theatre で行われたキーツと P. B. シェリーの詩を、朗読、歌、ダンスやタブローなどにアレンジした公演の記念パンフレット (souvenir) で、図版 7) のように内扉に記されている。

この公演を企画・運営した Frederick Harrison の意図は、パンフレット内部を読んでも明確には分らないが、恐らくローマの Keats-Shelley Memorial House 維持のための募金の一環でないと推測される。

こうした興行自体非常に面白い。図版 8) は、全 11 ある演目のフィナーレの接写だが、それに勝るとも劣らないのが、齋藤勇が 1924 年 5 月 15 日に当のスペイン階段横の Keats-Shelley Memorial House を訪れ、そこで (恐らくこの souvenir を入手し?) 表紙左上に記した書き込みだろう。



Takeshi Saito / 15 May 1924, / Inscribed in the Room / where Keats died in Rome.
若き齋藤勇の興奮が伝わってくる。Keats' View of Poetry 出版 5 年前のことだ。